

和歌山県大会最優秀賞（和歌山県人権擁護委員連合会会長賞）

身近な障がい者に目を向ける

新宮市立緑丘中学校 三年 坂地 悠太

2020年に開催される東京オリンピック、パラリンピックまであと1年を切りました。テレビや新聞で色々な障がいを持っている選手の特集をしているので、僕もとても楽しみにしています。このようなパラリンピック選手の特集を見て、実に様々な障がいがあることが分かりました。僕が普段生活している中で出会う障がい者の方といえば、目の不自由な方、車いすの方、知的障がいの方。これらの方々とは道ですれ違うだけです。登校するときにもいつも3人の障がいのある方が、女性に引率されてどこかに向かっているのを見かけます。僕はその方々がどこへ向かっているのかすら知りません。パラリンピックの選手のことは特集が組まれて知っているのに、身近にいる障がいのある方々について何も知らない自分にびっくりしました。

一体、あの人達はどこへ行っているのだろうと思い、母に聞いてみたところ、母は「下田にある障がい者の方々の作業所に通っているんじゃない…?」と言いました。そこで何をしているのかは分からなかったのですが、実際にそこに行って話を伺うことにしました。

その場所は「わかば園作業所」という名前でした。ちょうど作業が終わったところで、たくさんの方々が挨拶をしてくれました。僕の勝手な想像で、障がいを持つ人はあまり明るくないイメージがありましたが、全く正反対で、とても明るく活き活きとした方々ばかりでした。登校するときに出会う方々に挨拶をしたことはないのですが、今度会ったら笑顔で挨拶を試みようと思いました。

園内に入って、障がい者の作業や生活を支援している方にお話を伺いました。

まずは、障がいの種類について教えてもらいました。障がいは大きく分けると三つで、身体・知的・精神があるそうです。今、僕は眼鏡をかけていますが、それも身体の障がいの一つです。僕は眼鏡をかけていないと、みんなと同じように生活できないからです。それを改めて聞くと、わかば園で生活をしている方々が身近に感じられました。

次に、園内の事について教えてもらいました。園内には本当に様々な人がいるそうです。その中でも、障がいがある人は外で作業をして、障がいの重い人は園内で一日を過ごすそうです。話してくれた方は、

「障がいの重い人は感情を読みとることが難しく、何を支援したらいいのかが分からないときが大変なんです。」

と言っていました。毎日接していても難しいのだから、初対面の僕には到底不可能だろうなと思いました。

さらに、障がい者への接し方についても教えてもらいました。一番大切なのは「してあげる」という気持ちにならないことだそうです。障がいを持つ人もそうでない人も、同じ人間として生活をしています。普通に生活をしている人と障がい者を分けてはいけません。だから「してあげる」のではなく、対等な関係で接していけばいいのだそうです。

最後に、障がいを持つ方々と作業をする上で注意していることを教えてもらいました。それは、できない人ができる人に合わせようとするのではなく、できる人ができない人に合わせるのだそうです。なぜなら、できる人に合わせようとするとうつやましい思いをする人がいるからです。みんなができることを進めていくことが大切で、効率もよいそうです。

色々教えてくれた方が

「今から『終わりの会』があるので、是非見学してってください。」

と言ってくれたので、見学しました。部屋に入ると、20人くらいの障がいを持つ方々がいました。僕はしっかりと目を合わせることができませんでした。毎日支援をしている方々は、握手をしたりずっと手を握っていたりしていました。声をかけて反応がなくても、ずっと笑顔で「対等な関係」で接していました。本当に安心できる場所だと思いました。

僕は今まで障がい者に対して偏見を抱いていました。多分、多くの人が僕のように偏見を抱いていると思います。しかし、これから僕は毎日障がい者を支援しているあの方々の

ようにうまくはいきませんが、少しずつ、障がいを持つ方々と対等な関係を築けるようにしていこうと思います。そんな社会になればいいなと思っています。

まずは第一歩、登校時に会う3人の方々に挨拶をします。